

「人生の三大祝日(一)」

(22)

より 「人類完成の歡び」
人は誕生と結婚と昇天をもつて三大祝日となすべきである。誕生と結婚の芽出度さは誰しも文句なしに承認する祝日であるが、昇天をもつて祝日の日とするのは理解され難いであろう。世人が人生最大の悲しみとしてこの死を、最大の祝日という逆説を立てて奇をてらつて快とするものではない。

人生における生死は萬物生成化育の順律に起る必然的な摂理なのである。人は萬物の靈長であるから、惟神の摂理によつて死後、靈界(幽界)に復歸し、靈界での生活を営むことになる。現在、地上に在る肉體はただその準備時代に使用される體カラであつて、その本体は靈なのである。昇天をもつて人生最大の慶事となすゆえんである。

(中略)

人生は本来、己の住家は靈界であつて、一時的に肉體という身體を容器として心が現界に現れて精神的に修業し、再び眞の故郷に旅立つ門出が死と呼ぶ関門である。肉親は體的に悲しむであろうが、逆に靈界の父母は出産したと喜んで迎え、また功成り名遂げたと喜んで迎えてくれるのが靈界の神であり親である。だから宗教本然たる靈界の實在、靈界の実相並びに段階、靈界生活など、人は現世に於いて未來に必然な永住・安住の生活を確信づけ、安心立命づけて、靈界(幽界)に復歸可能な眞の教に徹底せねばならない。井の中の蛙大海を知らずとは、現代人間界の行状である。宇宙大御祖みおやの恩恵を充分生前に栄養とし、靈止ヒトとしての道を極め、業に励み、執着なく、後顧の憂いもなく、人生としての使命を完遂して勇躍、卒業生徒の心境を以て、家族も喜びながら涙する大祝日とせなくてはならない。